

質問書方式による考える力をつける教育実践 2

田 中 裕

キーワード：質問、考える力、教育実践

要 約

この論文は、前回^[1]に引き続き講義「見えない世界」での教育実践の報告である。この講義は質問を軸として考える力をつけることを目標としている。方法の骨子は「質問書方式」、「SQ3R 法」、及び「読書百遍」の 3 つの方法を修正して組み合わせたものである。前回の報告と異なる点は講義を理解するための設問集を用意した点である。これにより学生の集中力が増し、質問をする力はよりいっそうついたと思われる。

1. 3 つの方法

この授業で行った方法は「質問書方式」、「SQ3R 法」、及び「読書百遍」の 3 つの方法を修正して組み合わせたものである。最初にこの 3 つの方法とこの教育実践でおこなった前回に比べての修正点を説明する。

1. 1 質問書方式

質問書方式は田中一^[2]によって提唱された方法である。その骨子を次に示す。

1. 受講者は講義に対する質問及びその質問の背景など質問の説明を授業時間の終わりに書く。
2. 質問書を読んで評価する。
3. 質問に応じて回答書（場合によっては補講書）を作る。
4. 質問書の評価を成績評価として採用する。

質問書方式はこれ以外に何人かの人の実践報告があるがそれほど多くはない^[2]。最大の理由はコメントを書くのがかなりの作業になるからである。ただし授業の一部としてとり入れている教員は多くなっているのではないかと思う。本学（山手短期大学）でも授業中に質問を書かせる例がいくつかみられる。

前回^[1] および今回の教育実践でおこなった質問書方式はこれまでいくつかの実践^[2]方式と異なる点の一つがある。これまでの実践では質問は講義に関連することならなんでもよかった。しかしここでの実践では「講義に関連するが講義の資料や講師の話に答えがない100字以上の質問を考える」ことが課せられる。ここが最大のポイントである。そのため学生は、それまで

の自分の知識体験とその日の講義の話を結びつけた思考をせざる得ないことになる。このような質問を作ることは難しく、学生にとって最大の難問となっている。しかし難問をおこなってこそ進歩する面もある。文字制限100字以上を課すのは、いろいろな事物の関連の中で質問をして欲しいからである。100字以上とはその関連も考えよということである。また質問は一つということは大事な条件である。短い質問をいくつも考えるより一つの質問を深く考え100字以上にした方がよいと考えたからである。

1. 2 SQ3R

文章を読む場合、慣れない学生はどのように読んだらよいかわからない。一般にはただ漫然と読んで頭の反応を待つだけである。理解できたと思えばそれでおしまい。理解できなければ諦めてしまう。そこで読み方の指針を与える必要がある。ここで使った方法はSQ3Rと呼ばれる方法で、1946年にロビンソンという人が提唱しその後多くの人が改良を重ね、今も改良が続けられている方法である^[3]。この方法は読みながら「質問→答え」という関係を文章から作り出す作業が基本となって、全部で5つのステップからなりたっている。SQ3Rとはこのステップの名前の頭文字をとって名付けられている。そのステップはSurvey（概観する）、Question（質問、疑問を作る）、Read（読む）、Recite（暗唱する）及びReview（復習する）の5つのステップである。

この教育実践でとり入れた部分は「質問→答え」の流れをとり入れる点である。QuestionとReadを主に取り上げた。しかしながら前回^[1]の実践と今回の実践とは大きくことなる点がある。本来のSQ3R法では文章に対する質問を作るのは読者であり、1回目のSurveyで質問・疑問を作り、2回目以後でその答えを探すつもりで読んでいく。前回の実践ではその方法をとった。しかし読書経験の乏しい学生にとっては、これはかなり難しいことであった。そのため質問・疑問をもつことができず、集中力なく漫然と読むことが多くなった。そこで、主要な部分を理解するための設問を10ほど用意して、学生はその答えを探るつもりで話を聞き文章を読むように指示した。あきらかにSQ3R法の視点から見ると後退であったが、学生の理解度を考慮に入れると、この方が全体としての理解が進むと判断した。

1. 3 読書百遍

「読書百遍義（ぎ）自（おのずか）ら見（あらわ）る」という言葉がある。これは「どんなに難しい書でも何度もくりかえして読めば、意味が自然に明らかになる。」との意味である。著者^[4]は山手短大生活学科で文章を何度も読めば理解はどうかについて定量的に調べている。1年生のゼミでデカルトの「方法序説」を30回読み、理解の程度を1回ごとに記録している。それによると、読む回数が増えるほど理解力の平均値は増した。30回まで上がり続けている。なかには15回ぐらいまで全く理解ができなかったが、15回を過ぎてから急に理解が進ん

だ例もあった。30回でも上がり続けるが、最初の4、5回でもかなりの向上が見られる。読み方で大切な点は、1行程度を何度も繰り返して読むのではなく、分からなくとも一章くらいを繰り返して読むことである。

この経験を参考にして、できるだけ何回も読んだり、聞いたりする機会を多くすることをおこなった。内容に関する繰り返し回数はおよそ11回である。

2. 授業方法

さて私が「見えない世界」という授業を行った方法は上記3つの方法を組み合わせたものである。質問書方式は良い方法だが、私の学科（短大生活学科）で行う場合一つの問題点がある。それは講義を聴くだけではなかなか一度では理解できない学生が多いということである。もちろんこれには話す内容の難易度や学生の関心が関連している。しかし「見えない世界」は学生が関心のある理解しやすい講義ではない。聞く人も多様である。全ての人が一度で理解できる内容にすることは不可能に近い。またそのようにレベルを下げた講義は適切なものとは言えないであろう。そこで聞くだけでなく自ら読むことを多くした講義にしたのである。もっともこれはもう講義とは言えないであろう。

前回^[1]の実践報告と異なる点は、SQR3の説明の部分で述べたように学生の理解を助けるために講義内容に関する質問をあらかじめ与えた点である。この質問は授業の最後に回答し、学生同士で解答書を交換し採点してもらった。この点が新しい点である。また出席の取り方、学生に声を出して読ませる等も前回と異なる点である。

この授業方法の骨子を要約すると次のようになる。

1. 講義内容に関して「質問→答え」の連鎖を作るため、あらかじめ質問を用意する。
2. これまでの既存の知識と講義で得られる新たな知識を結びつけるため、資料に答えの無い質問を考える。
3. 実質的に何度も繰り返し読み、聞き、考えることを行う。「出席カードによる設問」「前回の質問の回答」「質問表を読む」「2度ほどの黙読」「声をだして読む」「教員の説明」「文章の黙読+回答」「回答の説明+採点」「答えの無い質問を考える」さらに各個人に返却した前回の質問へのコメントを読むことが含まれている。けっきょく11回ほど繰り返している。前回の報告では「前回の質問の回答」「2度ほどの黙読」「教員の説明」「答えの無い質問を考える」「各個人に返却した前回の質問へのコメントを読む」の6回である。

以下に詳しい授業の流れを示す。

1. 出席をとる。授業開始と同時に、小さなカードを配り、前回の授業に関連したことを質問し、それを1分以内に書いて回収する。書けない場合や前回休んだ場合はそのむね書いてもらう。前回学んだことがどれくらい頭に残っているかを調べることができる。

2. 前回の授業で学生が書いた質問に対する回答書を配布し重要な質問に関して説明する。
回答書は学生の質問の中から20問程度を選び、それに回答を付けている。量としては4000字程度である。これにより学生は他の人がどのような質問をしているかを知ることができる。いろいろな視点があることを知り、今後質問を作る場合に有効になる。
3. その日の授業内容に関する7－10問程度の質問を書いた設問用紙を配り、学生に声を出して読んでもらう。これにより、その日の授業は何を学ぶものかを知り、それに関する質問を頭に入れる。これは講義を受ける準備となる。質問は文章あるいは私が講義の中で話す中に回答が含まれているものと、考えなければならないもの、あるいは意見を求めるものなどある。単に選択するような問題は出題しない。少しでも考える力をつける訓練をしたいからである。
4. その日の資料を各自に与え1回以上黙読させる。与える時間は資料により異なるが10－15分程度である。資料は学生向けに私が書き下ろしたもので量は約3000字である。これ前回の報告(4000字)より少ない。時間配分を考え少し少くした。読む時、読めない漢字、意味のわからない言葉を抜き書きして、先ほど配った設問用紙に記入してもらう。読み方のポイントは、「読書百遍」^[4]で明らかになったように、分からない小さな範囲を何度も読むのではなく、資料全体を一度に読み、それを繰り返すように指導してしている。また分からない言葉は最初から意味を調べることはせず、読み流し文章全体から推定するように指導している。仮に意味を調べる場合も3度くらい読んでから調べるように指導した。学生が文章を理解できないのは、言葉の意味のこともあるが、文章全体の流れや論理性が理解できていないことが多いので、辞書を調べても分かった気にならないことが多いので、最初は分からない部分をチェックするだけでよいと指導している。
5. 学生に声をだして読んでもらう。この時読めない漢字の読みを確かめてもらう。意味が分からなくとも読めることは重要なので漢字の読みは早い段階で分かるようにしている。学生は読む場合、最初に設問が与えられているので、かなり能動的な姿勢で読むことができる。
6. 教員がその日の内容に関して説明する。この間学生は答えることができる設問に関しては答えている。設問用紙がある種のノートの役割をはたしている。
7. 説明の後少し時間を与えて(10分強)文章を黙読しながら設問に答えを書く。この間教師は前回の設問用紙を配る。これには質問に関して点数で評価してある。また適度に文章によるコメントもつけてある。
8. 設問用紙を学生同士で交換し、先生の回答を聞きながら採点できる部分は採点してもらう。設問の答えは文章回答がほとんどで、○×式より採点しにくい、学生の判断により採点してもらう。

9. 最後に「その日の講義内容と関係するが資料や私の説明には答えが無い100字以上の質問を考えること」をする。これがこの授業最大の難問でかつ授業のポイントである。学生がもっとも頭を悩ます部分でもある。これにより資料で得た新たな知識と、これまで自分の中で持っていた知識とを関連づけることを強制的にする。難問だが、自分の知識を関連づけ、物事を多面的に見る第一歩と考えている。学生は最後の20分ほどを使いこの課題を行い設問用紙とともに提出する。

なお授業時間以外の教師の仕事は次のようになる。

1. 学生一人一人の質問書を評価してコメントや回答を書く。評価は2点満点である。形式がととのっていて語句の意味や年代を問うような単純な質問でないかぎり2点とする。形式が整っているとは、その日の講義に関連したことで資料に答えの無い質問であって100字以上であることである。
2. 重要な質問の回答書(4000字程度)を作る。受講者が150名程度いるので各自のコメントと回答書を書くだけで10時間以上かかる。
3. 資料(約3000字)を書く。毎回10-15の言葉に関して、漢字の読み、および意味を付け加え、文章を読みやすくした。

3. 授業 見えない世界

上記のような授業の結果がどうであったかを述べる前に「見えない世界」という講義について簡単な説明をする。この授業は授業名から推定されるような怪しげな内容(超常現象等)の講義ではない。学生と話していると物事の表面だけを見て判断することが多いと感じることが多かったので、「物事の裏や原因あるいは、いろいろな理由で見えない部分を考える」きっかけになる授業を目指して2002年より始めたものである。大切な授業と考え最初から1年生前期の必修科目としておいている。2008年度の受講生は147名で3クラスに分けて講義をおこなっている。考える力をつけることがこの授業の目的であるが試行錯誤の結果2008年度の教育目標は次の3点である。

1. 何度も読めば難しい文章も理解できることを体験的に知る。
2. 疑問、質問を作る力をつける。
3. 見えない世界を考えることができる。

文章を読める力は、人間が歴史を通じて作り上げてきた多くのものが言葉で表現されているだけに、必須のものである。しかしながら形あるものを主に表現するテレビをはじめとする、いろいろなものの影響により学生の文章を読む量が減り、読む力も落ちている。学生が文章を読まないのは、読んでも理解できないからであることが多い、ここでは愚直な方法だが、「何度も読めば文章を読めば分かる」ことを体験させることが第一の目的である。

第二の目的は疑問・質問を考える力をつけることである。山手学園の教育理念の一つに「自

学自習」がある、これができるための第一歩は自分で疑問・質問を考えつけることである。また最近提唱されている社会人基礎力の中にも「疑問をもつこと」という項目がある。このような目的にそって質問をつける力を強制的につけることを目指している。

第三の目的はこの科目ができた本来の理由「見えるものの背景にある見えない世界を考えることができる」ことである。そのために学生にとって比較的身近な例をとりあげ、実は見えない部分を知ると、どんなに理解が変わるかということを示す例を学ぶ材料とした。難易度は多くの学生が資料を何度も読まないといほとんど理解できないようなレベルである。

2008年度の具体的内容は「何故書物を読む必要があるか」「読書百遍義自ら見る」「質問、疑問の大切さ」「社会と個人を理解する」「食品添加物」「暗くて見えないもの」「電磁波によって見え方が異なる」「隠れて見えないもの（医学への貢献）」「小さくて見えないもの」「自然の累層性」である。

4. 何度も読めば理解できる

この講義の第一の目的は「何度も読めば難しい文章も理解できることを体験的に知る。」ことである。前回の報告^[1]では文章を何度も読むことに関して学生が講義終了時でどのような意見を持ったかは述べなかった、今回はそれを最初に述べる。最後の講義で「この講義では毎回文章を何度も読んでもらった。文章を何度も読むことは理解する上で、大切と思ったか。実際に文章を読んでどう思ったか。」という質問をした。回答は文章でおこなってもらった。回答者は147名の受講者中136名である。なお以下の文の「」で囲まれた部分は学生のコメントである。

4. 1 何度も読めば理解できる

学生に読ませた文章は学生にとってはかなり難しいものである。ほとんどの学生はとても難しかったと述べている。簡単でしたと答えた学生は受講者中数名程度である。そのような難しい文章でも多くの学生は「何度も読めば理解できる」ことに賛成してくれる。例えば、

「私は文章を何度も読むことはとても大切だと思いました。実際に文章を1回通して読むだけでは全く理解できなくても、何度も読んでいくことにより自然と理解できます。」

「とりあえず意味が分からない文章でも、2、3回目から理解できてきて、4回目からは理解できるんだなーと思いました。人の話を聞くときでも、1回じゃ理解できないこともあります。文章もいっしょなんだと思いました。」

「正直毎回難しい内容だったので1回読んだだけでは理解できませんでした。しかし3回ほど読むと「こういうことだったのか」とか、これは深く考えなくともいい所だ」などと思い、文章が理解できるようになっていました。」

「私は本を読むことが苦手で、文字の小さい字で、ふとい本とか、本当に読む気などしなかつ

たけど何回も読むことで、1回目にあまり意味が分からなかったことでも、二回目でだんだん分かってきて、三回目にちゃんと理解ができて、何度も読むことで、言葉の深さが分かりました。」

「これまでは多くの場合、一見して理解しづらく感じる文章を避けて読む、若しくは流し読みするようにしていましたが、何度も読むことが、理解する上で大切なことだと思いました。」

4. 2 授業以外でも何度も読んだら読めた

さらに授業の経験をもとに授業以外でも何度も読んだら理解できた経験を書いている学生もいる。

「始めは、何度読んでも、最初に分からなかったものは、繰り返しても分かるはずはないと思っていましたが、難しく理解しにくい文書を読んでいて、3、4回読んだ時点では全く分からなかったけど、7、8回読んだ所で自分の中で考え方やとらえ方などのその文章に対する見かたが変わってきて10回ほど読んだとき意味を理解できました。そのときこの講義のことを思い出して、「文章を何度も読むと分かる」ということはありえると思いました。」

「何度も読むと、今まで読んだ本でも、少し内容が理解できるようになったりして、おもしろくなかった本が、おもしろく感じたり、難しいと思っていた本が、意外と簡単だったりするようになってきました。」

4. 3 授業によりしだいに理解する力がついてきた

最初は何度読んでも理解できなかったが、授業が進むにつれて理解できるようになり、力がついたと述べる学生もいる。多くの学生が理解する速度が速くなったと述べている。

「読むのになれていくと理解していくのが速くなりました。」

「私は元々読書がとても苦手で本を読んだりすることが少なかったです。その原因の一つが読んでいる途中で内容がよく分からなかったりするからです。しかしこの授業で意味がわかりづらい文章を何度も繰り返し読むように心がけたら読むスピードもはやくなったし、意味も理解できました。」

「すこし抽象的で意味がとらえられない文章も、何度も読むうちにわかるようになります。それによって文章などを理解する力も速くなると思います。また、わからないことがでてきたら、すぐにあきらめるのではなく、何度も考えるようにすると、わからないこともわかるようになるかもしれないので、あきらめないことが大切だと思います。」

また読むことが嫌でなくなったと述べてもる。

「文章を読むのが嫌でなくなった。」

「文章は読めば読むほどたのしいものだとなりました。」

4. 4 何度も読むとどのように理解が深まるか

読んでいくとだんだん内容に関する理解が深まっていくことを具体的に少し詳しく述べている学生もいる。

「1回でも理解できないことはないけれど、何度も読むことで正確に頭の中でイメージすることができる。「文章を何度も読むと分かる」ということにつながるのだと思う。」

「何度も何度も繰り返し読めば読むほどイメージがわいてきておもしろいと思いました。」

「理解できていると思っていても実際はちがうふうにとっていたりと何度も読むことによって、みずんにミスをふせげるのだと思います。」

「文章は何回も読んでいく内にかくされている意味がたくさんあることが分かるので、何度も読み直す事はとても意味があり大切だと思いました。」

「1回目読んだ時よりも2回目のときの方がゆっくりと読んでいくから細かいところにも気付けるし理解できる。1回目見落としたところは2回目で見つけて、2回目見落としたところは3回目でわかる。」

「私は本を読むことがもともと好きだったので、文章を読むことに苦痛はまったく感じませんでした。、、、。何度も繰り返して読むことによって、こんなに理解できる大きさに違うんだなあと思いました。」

「何回も読めば色々な捉え方が出来るので大切だと思いました。」

「もう一度期間をあけて読んでみるとまた違った感じかたを思うので、繰り返し読むことは大切だし、面白いと思います。」

4. 5 意味の分からない言葉は気にしない

意味がわからない言葉は全体から推定せよと言ってきた。

「文章を何度も読むことの大切さはとても理解できました。又、付属して「わからない言葉は気にしないで読み続ける」ということも、とても重要だと感じました。わからない言葉の前後を何度も読んでいくと、自分の中でだいたいの意味が通っていくのをこの授業で感じました。」

「たとえば、わからない単語があっても、たくさん読むことにより全体の流れを理解することができる。」

4. 6 何度も読むとかえって意味がわからなくなる

何人かの学生が何度も読んでいくと混乱して意味がわからなくなると言っている。

「何度も読んでいくと逆に混乱してきて話の内容が見えなくなることあると思いました。」

「「文章を何度も読むと分かる」と最初に言われたときは、逆にどんどん意味が分からなくなっていくんじゃないかなと思って聞いていました。」

「文章を何度も読むことは理解する上で大切だと思ったけど、1回読んだだけで分かること

もあるし、たくさん読むと疲れるし、余計分からなくなる。何回読んだかではなくて、真剣にゆっくり読めばいいと思った。」

これは認識が深まっていく段階では当然のことと思われる。混乱しているところからさらに理解が整理されていく過程が体験できればよいと考える。

4. 7 何度も読めば分かることは大切

「全く興味もないことを何度も読み続けることは苦痛で少し難しく思いましたが、むずかしいことを何度も読んで理解してスッキリとすることはとても気持ちが軽くなるし、解放されて、うれしくなるので、大切なことなんだと思いました。」

「文章を何度も読むと分かることに今はとても理解することができます。これからもこのことを大切にしていきたいです。」

「たとえば、小説や文章を読むことが嫌いでも、ぜひ、たくさんの人に何度も読んで、理解していき、文章を楽しんでほしいです。」

4. 8 何度も読むことの限界について

何度も読んでも全ての文章が理解できるわけではないという意見もでてきた。当然ながら何度も読むことの限界もある。次の意見は限界を述べたものだが、何度も読むことを否定しているのではない。

「何度も読むことは大切ですが、本当に理解するためには、声をだして読み、ある程度書くことも必要だと思います。」

「何度も読んでわかるか否かは文章による。」

「数学の問題などは何度も何度も読んでもわからない。」

「興味がないものは文章を読んでいると眠くなります。」

「理解しようとする気持ちと根気よく読むことも大切なことだと思います。」

「英語は何度読んでもわからない。」

4. 9 文章を読む利点

文章を読む利点を繰り返し読む中で見つけたコメントもあった。

「文章をくり返して読むことにより物事の成り立ちを知ることができる。」

「文章を何度も繰り返して読んでいたら頭が良くなりそうです。」

「分からなかった漢字も言葉も覚えることができました。」

「人に聞いて分かった言葉と自分で見つけた意味とでは、違うと思う。自分で見つけた方は、忘れないで脳に焼き付いていると思います。だから文章を読むことは大切なことだと思います。」

「このように自分でじっくり読み考えたりすることは勉強の面以外でもとても大切なのでは

ないかと思いました。」

以上の学生のコメントをみると「読む事への」積極的な評価が多い。昨年までに比べると学生の読む事への集中が高まったことが感じられた。この理由は読む動機付けとして昨年までは「資料に答えの無い質問を作る」だけであったが、今回は事前に講義内容に関する設問を用意していたため、動機付けとして設問の答えを探すということがあらたに付け加わったためと思われる。

一般に文章を読むことの抵抗で一番多いのは「理解ができないから」というのがかなりある。これに対して何度も読むというのは時間がかかる愚直な方法だが、理解する方法を示し体験させたことは、文章を読むことが基本的な力だけに、よい経験になったと考える。

5. 質問・疑問の能力は高まったか

この講義の目的の二つめは「疑問、質問を作る力をつける。」ことである。この力はある意味では付け易いのである。何故なら学生はこれまで、強制的に疑問・質問を考える訓練はつんでいない。したがってそのような訓練をすれば比較的結果は出やすいものとなる。以下の学生のコメントに見られるように質問・疑問の力はついたと答える学生が多い。ただし質問を作ることは、今までに経験したことの無いほどの難問だったようだ。かなり多くの学生が「難しかった」と述べている。

以下は授業の最後に「毎回質問を書いてもらったが、質問の力はついたか。」という質問への回答である。

5. 1 とにかく質問は難しい

質問を作ることはかなりの難問だったようだ。多くの学生が最初はまったくできなかったと述べている。しかし授業が進むとしだいにできてきたようだ。

「最初は、質問をするという意味自体がわからず自分で質問を考えるなどできるはずがないと思っていましたが、毎回の講義でこの質問を作るということが一番考えさせられることであるなと思いました。」

「最初、授業の最後に毎回質問を考えると聞いて、正直、苦手な授業だなと思いました。最初のうちはすごく時間をとっていました。先生の採点も1が多くて、どんな質問をすればいいのか悩んでいたけど、授業を受けていくごとに、自然と疑問に思うことがでてきて、そうしているうちに2をとることもできるようになりました。」

「答えがのっていない質問を考えるのはすごく難しくてほとんど1点しかとれませんでした。でも何度も文章を読めば自然に疑問に思うことがでてきて、2点をとることができました。単純にそれがうれしかったし、そういう小さいことから、質問をする力がついたと思います。」

「今でも私は、やっぱり質問を考えることがこの授業で1番の苦手ですが、でも1番自分の

力がつくのはこの質問をする所だったと思います。授業を受ける前は、こんなに質問をするのが難しいことだなんて知らなかったし、「質問して何の意味があるの？」っと思っていました。でも今は疑問をもつことが大切で自分の力に変わっていくんだと思います。」

「内容以外にも聞きたいことを探すので、毎回正直なやみ、質問していました。」

5. 2 他の方の質問を見て

最初の段階では質問を作ることの意味もわからない学生もたくさんいた。その学生たちに役立ったのは、他の方の質問を集めた質問集である。

「私は、質問を考えるのが苦手で、毎回質問を考えるのが大変でした。でも、他の方が書いた質問集を読んで、こういう風なことを質問すればいいんだとか、こんな質問全然思い付かなかったと発見していくうちに、資料を読んで、今日はこれについて質問しよう！とぱっと思い付けるようになったので、少し質問する力がついたと思います。」

「いつも授業の最初に配られるみんなの質問集を読むと、よくみんなあの文章を理解できていてそれで疑問も私が考えつかなかったような質問でいつも感心しています。」

「前回の質問をまとめた紙もくばられたので他の方がどんな質問をしているのかが知れたし、それと同時にこんな質問の仕方もあるのかということも知れました。それから自分の質問をいろいろな角度から見ることで新しい質問が生まれたり、内容の深い質問をすることができるようになったので、この授業を受けて質問する力はついたと思います。」

「初めは何を質問したらいいか解らず、適当な事を100字にも全くなりず質問として書いていました。だけど、毎回の皆の質問の例を読んでいたりする間に、“こんな風に質問すればいいんだ”、“こんな風な捉え方があるんだ”と感じ始め、だんだんと100字を満たすきちんとした質問ができるようになりました。「質問する力」は自分でも分かるくらいに身についたと思います。」

5. 3 質問をまとめるのは難しい

質問は思いつくけど、うまくまとめて相手に伝わるようにするのは難しいという意見がありました。質問は一つで100字以上にまとめることを課していますから。質問の背景等も考えて説明せねばならず、学生にとってはかなり難しいことです。ですからこそ訓練になります。

「講義を受ける前と今を比べると、質問をつくる力はついたと思う。しかし質問したいことを説明して、相手に伝えて、理解してもらうことが大変だった。質問は思いつくけど、何故そのような疑問をもったのかを伝えるのはとても難しいと思った。」

「まだ自分には質問する力はついていないと思います。話や文章などを見て、そのあいまいに、「なぜ?」「どうして?」と思うことがあったとしても、それをうまくまとめて言葉にすること文章として書くことができていないから、自分自身もう少し、質問をするときに、ど

ういうふうに言葉や文章をまとめてかつ、質問する相手にちゃんとつたわるかを考えていけないといけないと思っています。」

「今まで質問といえば、ひとことくらいで終わる簡単な質問しかしなかったけど、見えない世界での質問は100字以上にしなければならなかったので、考えるのが大変でした。でもそのおかげで文章を読んでそこから質問をつくる力がついた気がします。」

5. 4 「見えない世界の授業以外で」質問がでてくる

かなりの人が授業以外の日常の場面で質問・疑問がでてくるようになったと述べている。このようになることがもくろんでいたことだから、成功と言える。

「むりやり質問を作ってもみんなのように上手に作れなくて、変な質問ばかりになってしまうので私には今でもなかなか難しい講義でした。でもはじめの頃に比べると、少しはついたと思います。講義以外の日常生活でも質問を考えるようになりました。友人の話やTVでの話を聞かたびに、知らぬ間に質問を探していました。自分でもビックリしました。」

「文章を読み、わからなくて質問するのは簡単だけど、文章を理解した上で、質問するのは難しかったです。しかしそのおかげで、日常生活でも質問する力がつきました。私はバイトを始めたのですが、わからないことを今までは質問もせず、そのままにしていました。でも、今のバイトではわからないことを積極的に聞き、質問することによって、知識とやる気がつきました。」

「徐々にですが、質問をする力や疑問を持つ力が備わったように思います。普段の生活の中でも、一つのことが気になれば、また新しい疑問が浮かび上がり、様々なことに興味を持てるようになりました。ただ質問をするというだけでなく、それに対する答えを導き出す力もある程度ついたと感じます。」

「自分では質問する力はあると思っています。なぜなら普段の事柄でも、前だったら「別に知らなくてもどうにでもなる」と思っていたことが、今では「なぜここはこのようになるんだろう」と思うようになったからです。」

「考えることで、日常の中でも、疑問に思ったりするようになりました。」

「質問をする力は、前よりもついたと思います。この授業をしてから、なぜ、これはこうなんでしょう？とかいっぱい頭に浮かんできます。友達と話しているときや家族で話しているときも、疑問が浮かんたら、すぐに言うようになりました！そして質問をして疑問がとけたら、頭が少し良くなった感じがします。質問することによって疑問がとけて、それで今まで見えなかった世界が見えるのだなあと思いました。」

「出身高校の先生に質問したら、「あなた、質問する力がついたね!」と言われたので自分ではあまり力がついてないと思っていたのですが、力がついたのかなと思っています。」

「テレビのニュースなどを見えても、普通に聞き流していたことをなんでだろう。なんで

こうなるんだろうと疑問を持つようになったりしました。」

「他の講義を勉強している時に、見えない世界の時と同じように文章を何度も読んで理解したり、質問が出てきたりするようになりました。」

5. 5 文章を書く力や読む力がつく

質問するためには文章を理解せねばならず、そのために文章を一生懸命読むことが必要である。結果的に文章を読む力もまたよくなった。また100字にまとめる必要上、文章を書く力も同様です。

「私は文章を考えることが嫌いだし、レポートなどや、自分自身の思ったことを文章にするのが、とてもとても苦手でした。それは生まれつきのものだと思ってずっと苦手なままだと思っていました。しかし、この講義で毎回100字以上の質問をすることによって質問する力はだいぶあがったと思います。」

「質問する力をつける前に、文章を理解しないと質問もできないので、質問を考えようとして一生懸命文章を読むので、質問する力がついたと同時に、文章を理解する力もついたと思います。わからないから質問することが、理解しないと質問もできないんだと思いました。」

「資料を読むのが、難しいと言うのか嫌いです。資料の内容とかぶらない質問を考えるのは、絶対資料を読まないといけないことだから、苦労しました。でもこの授業を受けてから、文章を読む力、質問する力が少しはついたように思います。」

5. 6 質問がかなり上手にできるようになった

質問がかなり上手に、自然にできるようになった学生もたくさんいる。

「この講義を受けていくうちに考えることが多く、質問をつくらうとすればいくらでもあることに気がつきました。それは考える力がついたからだと思います。頭を使って質問を考えることは難しそうに思いましたが、意外にすぐ思いつくんだなと思いました。」

「この授業での質問の重要性として「書かれていることが全てが真実ではないのかもしれない」と意識して読むことが大切と先生が言っていたのをよく覚えています。文章をうのみにせず自分で書かれていることについて考えると、意外ととても単純なことや根源的な疑問が生まれてきました。」

「率直に質問する力がつきました。今まではわからない所をさがして書いてきましたが、授業をかさねるにつれて、疑問が点がすぐにうかんできました。むずかしい事をきくのもいいけど、もっとみじかな所に疑問はいくつもあるんだなと思いました。」

「何回も授業を受けて書いていくうちに慣れてきたのか、質問をスラスラと書けるようになりました。何か自分の中で疑問を持つことはとても意味のあることなんだと思いました。」

「問題を解決するよりも質問を考える方が好きになりました。この学校に入学してから質問

するという授業があったことをとても嬉しく思います。自分の中で質問する力はかなりついたと思っています。それに誰にも答えられないような質問を考えるという所に、少し楽しみを感じていました。」

「質問する力はついたと思います。1つの事について無理やり、質問を作るのは最初むずかしかったけど、質問を作っていくうちに、どんどん最初よりはむずかしくなくなってきて、速く質問が思いうかぶようになってきました。最後のほうになってくると、一つの質問だけでなく、たくさん質問が思いうかぶようになりました。毎回質問を書くことでこんなにも成長することができてきてびっくりしました。」

「最初の授業では、全く質問が浮かばなくて困っていました。しかし、この授業を受けるたびになぜかどんどん自分の中で疑問がわきでてきて、質問をすることが楽しくなってきました。」

5. 7 その他の意見

「先生に質問しなさいと言われたことではなくて、自分自身で質問したい！！教えてほしいと思うようになった。」

「興味がある内容なら質問をまじめに考えられるようになった。」

「質問する力は、色んなことに興味を持ち、考えることで日々身についてくると思いました。」

「正直に言うと無理矢理、質問を考えた部分もあると思いますが、質問をする力は、はじめに比べるとついたんじゃないかと思います。」

「いつも見たことも聞いたこともないような課題で、分からないときもありました。でもそこで課題を易しくするとなんの意味もなくなると思います。」

「今更ながら思い返してみると、今までのテストはずっと質問される側で、私は答える立場でした。質問を考えるというのも、難しいなと思いました。」

「この目標は、正直最初はめんどくさいなあって思っていました。ただの感想ではなく質問を考えないといけなかったので何度も考えました。でもそのうちにかってに質問が頭にめばえてきた気がします。ただの感想なら自分の感情をストレートにだすだけでだれにでもできます。でも質問はみんなちがった意見でおもしろさがあると思いました。」

5. 8 質問する力はまだついていない

多くの学生は質問する力がついたと述べているのだが、一割近い学生は力がついていないと答えている。しかし力がついていないと答える学生にも2通りある。第一のタイプはそばから見ていてかなりついてきている、もうちょっとと思う人たちである。例えば次のようなコメントを残している。

「質問する力がついたかと言われたら、あまりついていないような気がします。が、どんな小さなことでも質問することは大切だと思うようになりました。また、質問を考えることが楽

しいと思えるようになりました。」

「質問する力はないと思います。文章に対する質問ならできますが、プリントに答えの無い質問はなかなか出来ませんでした。単文でいいのなら出来たと思います。自分にたりない部分は発見できたと思います。」

第二のタイプはほんとうの意味で半期の間ではほとんど進歩しない学生である。質問自身が理解できない。このような学生には積極的に質問を考えることを否定する学生も多い。

「質問する前に全部分かってしまうので、質問する力は全然ついていないです。」

「質問はある人だけでいいと思います。授業の内容をよく理解できても、質問することがなくても、無理やり質問はしなくてはならないのでしょうか。」

6. 見えない世界を考えることができるようになったか

講義「見えない世界」のそもそもの目的は、「物事の裏や原因あるいは、いろいろな理由で見えない部分を考えるきっかけになるような授業をすること。」であった。最後の授業で「物の見方考え方は少し変わったと思うか。変わったとしたらどんな点か。」という質問をし、文章で答えてもらった。回答者136名中127名が変わったと述べた。以下はその内容である。

6. 1 物事を知りたくなった

今まで知らなかったこと、分からなかったことを知りたくなったと答える学生がかなりいる。

「ある物事があった時、知らないことは別にいいや、と見ようとしていなかったけど、知りたいと思うようになったし見て理解するようになったと思う。」

「今まで本当に知らないこともいっぱい、でも知らないからといって知ろうともしていなかったし興味ありませんでした。でもこの授業で知らないことをたくさん学び、それについて自分で質問を作るということをしてみて、今まで思っていなかったことでも、知りたくなり、真剣に考えるようになりました。何から出来ていて、どういう風になっているんだろう？など考えるようになりました。」

「興味の無いことは「どうでもいい」「関係ないよ」って終わらせてきたけど、疑問におもうようになってきた。興味を持つことから始めようと思う。そこから自分にプラスになるようなことがあるかもしれないし、なんでも興味ないで終わらせるのはやめようと思いました。」

「未知の世界を知りたくなった。」

見えない世界の内容は身近なことでありながら学生たちが知らないことで、知ることにより見方が180度変わるものを選ぶようにした。知らないことが知っていることに密接に関係していることを知ったことで、知らないことをほっておくのではなく、知ったほうがよいと考えるようになったのだと思う。

6. 2 他の面を考えること

この授業を始めるきっかけは、学生たちが直接見えるものだけにこだわり、他の面をみようとしなかったから、それを何とかしようと思ったのがきっかけである。したがって話をする時は必ず、いくつかの側面があること、否定面も肯定面もあることを強調した。そのことは十分伝わったと思う。

「今まで1点からしか見て考えなかったと思います。でも今はいろんな方面から見るように変わったかなと思います。」

「1例を見たり読んだだけでそれが正しい全てとは思わないこと。」

「ほんのちょっとだけ変わったと思う。1個のものに対して、いろんな方面から見れるようになった。そしたらちょっと楽しくなってきた。」

「私は今まで物事に対してはすごく否定的でした。この授業は何の意味があるの？とか上の者が下の者を支配する世の中はおかしいか？とか何事にも否定的でした。この授業を終えて、先生の質問のコメントやら、他の人の質問などを聞いて、そおゆう考えもあるのかということを感じるようになり、もう少し広い視野で物事を考えるようにしようと思ったところです。私は世の中に答えは一つだと思っていましたがいろいろな答えがあるということはすごくおもしろいことだと思います。」

「今までは、一つのことに對して、固執して考えすぎていたと思います。これからは一つのことに對して、いろんな方向からものを見たり考えたり、人の意見を参考にしようという考え方に変わりました。」

「テレビや新聞で得られる情報などほんの一部にしかすぎないと思うようになった。」

「私は初めの方は授業の内容が深すぎて、ついていけなかったけど、なっとくのいくまで考えているうちに、いつのまにか、見えない世界にすいこまれた様な気がしました。この授業を受けたことで、色んな視点から物を考えれるようになったのと、想像力がゆたかになったと思います。」

「普通にみていたものが違うもののように見えてきました。」

「何をするにしても良い面もあれば悪い面もあると思うようになりました。私は良い面か悪い面、どちらかしか考えてなかったけど、何をするにしても良い所もあれば悪いところもある。といった考えができるようになりました。」

6. 3 真剣に考えるようになった

考えることに真剣に取り組むようになったという意見もかなりでている。

「一つ一つを真剣に読んで、回答を見付け出そうと必死になって考えています。」

「変わった。深く考えるようになった。」

「一つのことに深く考えていきたいなと思います。今までは、けっこう適当な感じで物事を

とらえてきたと思うので、これからはけっこう一つのことで深く考えると深いので、色々なことが一つのことで知れるし、考えられるので、物の見方、考え方、変えていきたいと思いました。」

「理解することをあきらめず何度も読んで理解しようという点です。こんな風に考えたことは今までなかったからすごく変わったと思います。」

「今まで疑問に思っていたてもそのまま放っておいたことも、もっと調べて答えを見付けようと思えるようになりました。」

「変わりました。授業を受けるまえは、難しそうなことは、あきらめて理解しようとしませんでした。今では理解しようと努力しています。」

6. 4 一步深く考えるようになった

物事を一步深い地点から理解することも考えるうえでは重要である。このことも伝わったようだ。

「この講義を受ける前に比べると、すごく物の見方考え方が変わったと思います。それは人に対する考え方です。今までは、人から嫌な態度をとられると、何も考えずにすぐに腹をたてていましたが、今は「なぜこの人はそういう事をするのだろう？」と疑問をもつようになりました。」

「誰かが泣いていたり怒っていたりすると、前までは、何があったのか深く考えていなかったけど、今は、見えない部分で何が起きたのか考えるようになりました。」

「前は、今自分が見えているものだけにしか興味がなく、見えないものは存在する気付きませんでした。だけど見えない世界を勉強して、見えないものの存在に気付き、興味を持つようになりました。」

「質問が自然にでてくるようになりました。そしてその質問の答えがわかった時に、やっとその物について、わかったということになるのです。「知っている」というだけでなく、その物について「理解する」ということができるようになりました。」

「変わったと思う。分からないことは分からないという考えだったけど、何でこうなるのなとと考えている自分がいた。」

6. 5 物や人は単独で存在するのではない

何かを説明する時、常に他との関係話を話した。そのことから物や人は単独で存在するのではないことに気がついたようである。

「今まで自然の中にある物、人などは単体でできているとしか思いませんでした。極端にいうと人は一人で生きているというような感じでした。しかしこの授業を受けて、そのような考え方は違うということがわかりました。生きている人間も、色々な形の中で生きているんだな

と考えることができました。しかし、やっぱり複雑で、とても難しいことのように思えました。」

「大きい物は小さいものの集まりからできているということ。決して一つのものが、それ自体単体で成り立ち存在しているわけではないと知りました。」

「すべてにつながりがあること。」

6. 6 その他

学生たちは見えない世界の授業を受けて私が想像する以上にいろいろ影響を受けている。

「今まではけっこうただ頭に浮かんだことを言ったり、行動したりしていたけど、この授業で考える力をつけることができたので物事を客観的に見れるようになりました。」

「以前までは、本などなんのために読むのか全く理解できませんでしたが、見えない世界を受けて大切なことだと思えました。」

「見えない世界を知るというのは“自分の小ささを知る”ということだと思いました。この授業を通じて自分のまわりには「知らない世界」がおおすぎと思いました。自分は地元を離れて一人暮らしを始めて新しい生活、新しい世界を見たつもりでしたが自分の見ている世界は狭く、その狭い世界にいる自分は小さいと思いました。これからはもっと外に目を向けて世界を広げて自分を大きくしたいと思いました。」

「世の中のことをもっと考えなければいけないと思いました。」

6. 7 考えること・質問することへの懷疑

前回^[1]の報告での結論は「疑問・質問を作る力」及び「物を多面的に見る力」はこの授業で向上が見られたが、この2つが価値あることに関しては最後まで懐疑的な学生もかなりいたということが結論であった。しかしながら今回はこのような学生がかなり減った。その理由ははっきり述べることはできない。今回と前回の異なる点は今回は内容に関する質問をあらかじめ作ったこと、および授業方法に細かな修正を加えたことです。これにより集中力が前回よりはるかに高まった。このことが全体の理解を促進し、質的な変化を起こしたかもしれない。また私の講義内容も考える力が価値あることを学ばせる方向に修正されていたこともあるかもしれない。

前回「学生たちが考えることに価値を見いださない理由は根深いものがあると思う。学生たちが現在まで成長する段階で「考える」ことが役にたつと実感することが少なかったのだろう。現在は消費社会だからお金さえあれば生活に必要な物は手に入る。そこに考える必要はないのである。せいぜい宣伝されている多くの商品の中から選択するだけである。それも他の人が選ぶ物を手に入れば間違いは無く、事足りる。」と主張した。しかし今回の否定的な意見の減り具合から考えると、方法によっては考えることの重要性も伝えられるのかもしれないと思った。年度が異なると学生の質が異なるのも確かなことである。本当の理由は分からないのだが、

可能性を信じてこの方法に磨きをかけていきたいと考えている。

参考文献

- [1] 田中 裕. 2007年. 「質問書方式による考える力をつける教育実践」神戸山手短大紀要, 50, 35
- [2] 田中 一. 1999年. 『さよなら古い講義 質問書方式による会話型教育への招待』北海道大学図書刊行会
- [3] Study Guides Strategies. SQ3R reading Method. <<http://www.studygs.net/texred2.htm>>
(アクセス日2008年10月)
- [4] 田中 裕. 2006年. 「「読書百遍義自ら現る」は正しいか」神戸山手短大紀要, 49, 67